

# 虚の符

洪水企画 2019.2.10

ソラ  
イカダ

http://www.kozui.net

22

## ネジバナの人

久野雅幸

ネジバナの人が  
立って  
ねじれている

— あなたはいつたいたどの方向に向かっているのですか  
尋ねたが  
答えは返ってこない

— もしかしたら  
いつでもかならずすべての方向に向かっているのですか  
尋ねたが、また  
答えが返ってこない

— あなたの姿を見ていると  
わたしは「待つ」ことのたいへんさを思わないではいられません

— その人が言った  
— 「たいへんさ」とは「苦しさ」ということなのでしょいか

わたしは答えた

— いいえ、そういうことではありません  
それは「つまり」「苦し」とも「楽しさ」ともつかず

— その人は  
— それならば けっこう  
— と言って  
— 少し体の向きを変えた  
— そうして  
— いったい体がねじれた

## 暮らし

酒見直子

初めて母の顔を腫らしたときのように  
朝日を見て  
世界中を巡る旅人に会ったときのように  
水道の水を飲む

青を絵筆に乗せて大空を描くように  
窓を拭いて  
縁側で祖母と話をするように  
家具を磨く

生まれる前の記憶を探るように  
野菜を食んで  
風呂あがりの子をタオルで包みこむように  
皿を洗う

木の実を採集するように  
洗濯物をとりこんで  
星が瞬く大海原を航海するように  
シャツにアイロンをかける

未知を目指す小舟に乗るように  
布団に入る  
まばたきをしないのちの手が  
小舟をそっと押し出していく

## アフタヌーンティー

神泉 薫

まっしろなミルクをひとしずく  
琥珀色の水面に  
ゆっくりと垂らす午後

みずみずしいトマトの酸味を味わいながら  
ゆるやかにうねるパスタを  
くるりと巻き上げる

なつかしい風が通り抜ける道を持った  
一冊のうすい詩集

古都に住むひとのこぼれ話を追えば 不意によみがえる声

時を重ねることは

無言の祈りの小石を  
ひとつひとつ積み重ねること

在ることをねぎらい  
しずかに送る日々を豊饒を  
この地上で

一瞬でも味わえるなら

ポツンと置かれたティーポットの底にある

温もりは消えない  
もつと下に 耕された熱い大地の柔らかなさがある限り

唇に残ったバジルのさわやかな匂い

ページを閉じて席を立つ  
夏の窓が開いたら

もういちど巡り会う台詞  
高らかな

ウインドチャイムが  
聞こえる

## 黒い蟬

小島きみ子

冬の公園で  
私は一本の木の幹を見つめていました  
この木を上つていった 蟬のことです

あなたと

日傘を差して歩いた 七月  
私たちの影の中にいた 黒い蟬  
無数の蟬にたかられていた 蟬を助けて

こんな処にいたら駄目だよ、と言つて  
木の幹に上らせてあげた あなたの  
しろい指 のことす

儚く消えてしまふいのちを

助けられた蟬は  
木の幹をヨロヨロと上つて行きました  
助けられたのに 蟬は

蟬の 短いのちを全うして  
死んでいったでしょう

どうしていのちは 生まれるの  
死んでしまうのに

蟬を 木に上らせた あなた  
いづれ死んでいくことが分かつていて

助けた あなた

生きている時間の儚さを振んだ あなたの指

黒い蟬は 何度も生まれ替わる  
いのちの瞬間をただ生きる そのことのために

## 日常

坂多瑩子

夫が猫の子を孕んだとおおきわざだ  
そんなばかなことおきるはずないと  
いうと 腹がつっぱるのだという  
そのそばで茶トラの猫がにやにや  
あさむいである 孕むはずないけど  
放置するわけにもいかず医者に連れて  
いった 猫もついでとところを

みると本当かもしれない 留守番の  
医者だというじい様ができてふん  
ふん話を聞き終ると腹をさいてみ  
ましようという 夫はひきつけ寸前  
の様子だが逆らうわけにもいかず観  
念したのかベッドの上でうごかない

じい様の医者は じき取り出してみ  
せてくれた 案外うでがいいようだ  
グラデーションになっている臓物の  
かたまりの右下に二センチの軟骨み  
たいなものがくっついている これ  
ですなと じい様がいうので確かに

そうだと納得する 猫もしずかに見  
ている 夫はモニターで一部始終を  
みていたらしく 早く腹に戻してく  
れという からっぱの腹はしゅんと  
してきびしそうだ どうにか手術は  
成功であったらしい 日常には思わ  
ぬことがおきる あつてなく次の日  
がめくられていき切りおとされたも  
のは三人と一匹の記憶のなかでずれ  
なからふとついでに なのも起こら  
なかつたのだと自分にいきかせた

## 《ピオモルフィズム》

たなかあきみつ

1 世紀末まで

こんな不安定な土壌中を滑靴航行しつつ

ストラヴィンスキーの《春の祭典》を根こそぎ聴きとりながら  
この晩春に池田龍雄の一九七〇年代・八〇年代画に

多数の浮遊物体・曲線浮遊体を目撃した  
瞠目する眼珠や蛇や鳥肌が横臥したも

(とりわけ踊る蟬については  
クレタ島出土の葡萄酒壺を比較参照のこと！)

宇宙卵そして胚、胎生する浮遊体  
絡まり合う球体にして胎児、おお紐原

以前たしか京大博物館で観覧した埃っぽい瓶詰めめ  
フォルマリン地獄の幻臭を幻影に嗅ぎつつ

弓なりに闊歩する胎児大文字の BRAHMAN シリーズ  
湾曲して折れ曲がる鉤や爪

画面には抒情性を剥奪された六角形の雪華  
(ここでペントレイの SNOW CRYSTALS の写真の隊列をいったんブレイクせよ)

十一月の跳躍の波打ち際には断続的に  
いくつかの変哲もないテトラポッド(青空のマントラの傷口よ)

画面の配色はテラロソ系よりはむしろグレイトーンで進行中  
二〇一八年には練馬区立美術館にて池田龍雄展の開催中につき

ソウルシンガー、アレサ・フランクリンの生前の衝動的な歌声を  
闇雲にボーダーレスに流したくなる

2 レトロスペクティヴに

過現末バラレルテクストの  
アンモナイト図鑑の安息角からくるぶしが

オデロン・ルドンの《不格好なポリープ》の単眼に  
(なおかつ池田龍雄の《化物の系譜》の多眼性に) トボロジックにワイプした

後頭部と前頭部――まさに後ろ前に描かれ(龍頭！)  
食いしばった歯は汚れたまま生えそろうてはいても

ネメグト溪谷で発掘されたタルボザウルスの歯列そっくりの  
有刺鉄線もどきの歯列であえて

歯を磨かず歯ぎしりも凄かつたろう

ポーラ美術館の《ルドンひらかれた夢》展のチラシには  
ど真ん中でべろんとサーヴァルAの舌に正対しつづける

単眼の義眼にして上目遣いのボールペリアングル虹彩だ  
箱根はなぜか遠すぎて今も私は観覧できず当のチラシ圏内にはぎぎぎと

蜘蛛のぶつからお腹や屋根なし太陽の黒点もどき  
コブラを召喚する砂漠のボビーの群れの真紅の膨らみ

極東の一部上空でうめく秋雨前線のもとで  
砂岩の《火焰崖》での恐竜の連続歩行跡を幻視しつつ

池田 康

ふりつづけばいつか雨雲は消える  
と賢者は言う  
あにはからん  
雨雲はどんどん大きくなり  
地球を包み  
昨日と今日と明日をまるごと濡らす  
雲の奥では雷がうなり  
銃火ひらめき

菲 (フェイ)

蜂の巣になったフェイ

青梅街道と甲州街道が交わる宿駅  
明治通りと靖国通りが交わる賭場  
七本の鉄道が衝突する《時代》

この街には銀行いくつある

ざんこ ころうと  
金のゴート族

レーナーを渡る碧眼の男女

命からがら逃げているのに  
六叉路で渋滞するのなら  
十二叉路にでも二十四叉路にでもなるがいい  
あらゆる方向に逃げてやる

時間を失い  
途方に暮れるという言葉に囚われ  
途方に暮れ

人間なんかつまらないと  
蜂の巣になったフェイ

はやりの帽子をかぶった男たち  
煙草を吹かしながら  
遠くから見ている

雲の奥では雷がうなり  
地球を包み

\* Foye Dunwoy stored in BONNIE AND CLYDE

